

豪雨災害がわが地域に発生したら ～対岸の火事はいつかはわが火事～

7月に入って、九州北部、秋田県域で大雨があり、河川が氾濫して浸水、土砂災害が発生して人的な被害も含めて甚大な被害が広域に発生しました。また、新幹線の計画運休などで物流にも大きな影響がありました。低い土地に大量の流水が流れ込めば、浸水や氾濫が起きるのは当たり前ですが、それを事前にリスクとして備えをしておけば被害は最小に抑えられるということも当然です。

しかしながら、今回の災害ではこれまで経験していないから大丈夫という認識があったのではないかと思われます。自然災害には起きる理由があって、なぜ起きたのか見当がつかないということはほとんどありません。過去の履歴や旧地形などから発災の理由が見えてくることもあります。

もちろん、これまでの経験知を超える条件があれば、それに対して十分でないこともあります。確かに、最近の気象のトレンドがこれまでと異なってきていて、そのトレンドが当たり前になる可能性もありますが、今回の豪雨災害で共通に言われていることは、「これまで大丈夫だったから、今回も・・・」ということです。

だからといって、日常的におびえていては暮らせませんので、大事なこととして、何が起きればこうなるという災害勘が働くようになることが望ましいことだと思います。

それには、自分が暮らしているところはどんな地形で、どんな環境であるのかを知ることが大切です。そして、過去にどんな災害が発生していたのか、災害伝承をしつかりと知っておくことです。そのことだけでも、災害リスクを認識することにもなり、経験していないことを補うことができます。そして、避難ルート、避難場所、避難方法などを想定しておいて早期に避難することを第一に情報を家族、地域で共有しておくことです。

加えて、気象条件の変化にも敏感になって、前兆現象や変化を感じながら備えることが大切です。おそらく、今回の豪雨でも多くの方々が、大丈夫であろうと考えて避難が遅れたり、避難ルートを失ったり、前兆を無視したのではないかと思われます。特に、雨が一時的に弱まることもあって、避難行動を躊躇することもあり、それぞれ正常性バイアスが働いてしまった可能性も否定できないように感じます。

被災地でよく聞く言葉は、「これまで災害を聞いたことがない」「まさか、ここまで土砂が来るとは思わなかった」「川から相当離れているので、ここまで水は来ないと思っていた」「これまでも、雨水がたまることはあったが、今回のようなことはな

かった」「ここが警戒区域に指定されているとは知らなかった」「普段は水がない沢だったので、土石流が発生するなど予想できなかった」などです。

防災は地域を知ること、そして関心を持ち続けることに尽きると思います。それは災害伝承や言い伝えを大切に、その地域の成り立ち、周辺環境を知って災害リスクを理解することです。加えて、そのリスクへの対応がどの程度有しているのかなどの情報を共有することがとても大事なことです。早期に避難することは決して恥ずかしくないし、未然に過ぎてもよかったと思うことです。そして、飛び交う情報にも自分に都合の良い解釈をしないで、警報やこれまでの地域知を活用して、先を見ながら対応することが重要であるということ、今回の大災害だけではありませんが改めて実感します。

確実に避難行動が行われるためには何が必要かといえば、刻々と変わっていく周囲の状況にフレキシブルに対応する必要あるということだと思います。下表は、災害の時間経過を想定したのですが、その時点での状況に我々の行動が合わなくなったときに、大きな災害になってしまうということです。まさに、刻々と変わる状況の中で適切な行動をすることが求められることとなります。

時 間	主な出来事	必須の行動
0時00分	大雨警報が発表される	最悪のことを想定
3時50分	県内に記録的な大雨の発生情報	携行品の確認
4時00分	市が避難指示を発令	避難準備（在宅避難）
5時30分	小学校に避難所を開設	避難開始
6時30分	大雨特別警報発表	
7時00分	市が緊急安全確保を発令	避難終了
8時00分 ごろまで	小降りになる	帰宅禁止
9時00分	○△山の1時間雨量が観測史上記録を超える	状況の急変に注意
9時30分 から	土石流が発生、周辺の道路崩壊、河川の水位上昇（破堤情報、浸水、氾濫）、内水氾濫	避難不能、人、車の移動は危険、状況の確認